マルコ 16 章 1〜8 節「そこでお会いできます」

救い主イエス様の復活を記念して、教会は初めから日曜日に礼拝を献げてきました。そして、礼拝において私たちは、目には見えないけれども、よみがえられて今も生きておられ、ご臨在くださっている主イエス様にお会いしているのです。聖書のみことばによって神が私たちに語りかけ、その神のみことばを私たちが受け止め、神に応答することで、出会いが起こり、交わりが持たれるのです。

１．従ってきた女性たちの経験（15：40〜16：1）

十字架につけられたイエス様は午後 3 時過ぎに息を引き取られました。その日は金曜日で、日没から安息日が始まります。そのままではイエス様のからだは他の受刑者と共に無造作に埋葬されたでしょう。そんな中で、アリマタヤ出身のヨセフがイエス様のからだの下げ渡しを総督ピラトに願い出ました。彼はイエス様に対する信仰を隠していましたが、この時勇気を出して行動しました。神はこのヨセフをお用いになり、彼の行動によってイエス様の復活の一つの証拠が残されることになったのです。

ヨセフのような人は今もいるのではないでしょうか。彼は大切な一歩を踏み出しました。皆さんの中にも、イエス様への信仰を表し、行動を起こすことを促されている方がいるのではないでしょうか。

ガリラヤからずっと弟子たちと一緒にイエス様に従ってきた女性たちが、埋葬の様子を見届けていました。安息日は土曜日の日没で終わります。彼女たちは香料を買い求めて、そして夜が明けたら、イエス様の遺体に油を塗りに行こうと思っていました。この女性たちは、15 章 40 節と 47 節にも名前が記されているように、イエス様が十字架上で息を引き取られたこと、墓に葬られたことを見守っていました。その彼女たちによって、イエス様の十字架の死、埋葬、復活が一連の出来事であると証しされるのです。

彼女たちにとって、香油を塗ることがイエス様のためにできる最後の奉仕だと思われたことでしょう。しかしこの日、彼女たちは本当の意味での最初の奉仕をすることになります。イエス様の復活という驚くべき知らせを最初に聞くことになり、その知らせを伝えるようにと託されるのです。当時は女性が裁判で証言することは認められていませんでした。女性の証言は信頼されなかったのに、神はイエス様の復活の証言をこの女性たちに委ねたのです。このことは逆に復活が事実であることをより支持することになると言えるでしょう。

主イエス様に仕えようとする時、私たちも神の驚くべき御業を経験することでしょう。そして、その神の御業を証しするようにと使命を与えられることになります。Ｉコリント 1 章 26〜27 節。神の力、神の知恵が表されるために私たちも召され、イエス・キリストによって救われ、神の御業の証人となるのです。

２．復活と再会の知らせ（16：2〜7）

週の初めの日の早朝、彼女たちは準備しておいた香油を持ってイエス様の墓に向かいました。墓に近づくと、入り口の石が転がしてあるのが見えました。不思議に思いながら中に入ったことでしょう。すると、真っ白な衣をまとった青年が右側に座っていました。御使いです。彼女たちは非常に驚きました。さらに、御使いは彼女たちに驚くべき知らせを告げました。

6 節。イエス様は確かに十字架上で死なれました。そして葬られました。彼女たちはその様子を見届けました。御使いも十字架での死と埋葬を前提として語っています。しかし、御使いは言いました。「あの方はよみがえられました。ここにはおられません」。十字架で死んだけれども、よみがえられて、生きているというのです。

確かにイエス様が葬られた墓は空でした。それをどう説明できるでしょうか。弟子たちがイエス様の遺体を別の場所に運んだのでしょうか。マタイの福音書には、イエス様の墓の番をしていたローマ兵たちにユダヤの祭司長、長老たちが多額の金を渡して、「弟子たちがやって来て、イエスを盗んで行った」と人々に触れ回らせたと記されています。しかし、実際の弟子たちは自分たちも捕まるのではと恐れて、一つの家に隠れていたのです。まして、自分たちがイエス様の遺体を隠しておいて、後にイエス様はよみがえったとうそを言い広め、そのために自分たちが殉教することになっても主張を変えなかったということはとても考えられません。

イエス様の復活は時間、空間の中で確かに起こった出来事なのです。そして、すでに起こった事実に基づいて救いが与えられるのです。そのことが人々に告げられるのです。これが福音です。

7節。イエス様と弟子たちがゲツセマネの園に向かう時にイエス様は言われました。14章27〜28節。このようにお話しになっていた通りに、イエス様は先にガリラヤへ行かれ、そこで弟子たちはお会いすることができるというのです。

「さあ行って、弟子たちとペテロに伝えなさい」。14章の場面で、イエス様が「あなたがたはみなつまずきます」と言うと、ペテロは「たとえ皆がつまずいても、私はつまずきません」と言います。しかし、イエス様はペテロが三度イエス様を知らないと言うことを予告し、その通りになってしまったのです。取り返しのつかない失敗をしてしまいました。

しかし、そのような弟子たちに、とりわけペテロにイエス様は会われると言うのです。これは、イエス様が罪を赦してくださる機会となるということでもあります。ですから、弟子たちにとって、ペテロにとって良い知らせ、福音です。そこに弟子たちに対するイエス様の愛が表されています。あとは、ペテロたちがその知らせを信じて、ガリラヤに行けば良いのです。イエス様は先に行って、そこで待っていてくださるのです。

私たち一人一人が罪を赦していただけるのも同じように、主イエス様の十字架とよみがえりの事実に基づいています。ローマ4章25節。私たちはイエス様の十字架とよみがえりを見ることはできません。しかし、御使いのことばによって、聖書のみことばによって知らされています。私たちにはそのことを信じることが求められています。福音を聞き、信じるときに、私たちも救い主イエス様にお会いすることができるのです。そして、イエス様の十字架と復活が事実ですから、聖書のみことば通り、イエス・キリストを信じるなら、事実、罪を赦され、義と認めていただけるのです。

ガリラヤはイエス様が宣教を始められた場所であり、弟子たちがイエス様と出会い、弟子として召された場所です。十字架の直前に、弟子たちは散らされてしまいました。しかし、もう一度ガリラヤにおいて、よみがえられたイエス様が弟子たちに会ってくださり、彼らを新しく出発させてくださるのです。十字架とよみがえりによって罪を赦し、新しく生かしてくださり、「わたしについて来なさい」との召しに改めて立たせてくださるのです。

私たちが罪を犯し、悔やんでいるときにも、主イエス様は私たちに会ってくださいます。十字架で死なれ、よみがえられたイエス様が会ってくださって、私たちは罪を赦していただいて、新しい歩みに導かれるのです。救い主イエス様の証人として、弟子として生きていくことができるようになるのです。

３．恐れた女性たち（16：8）

8節。彼女たちにとって、この朝の体験はすべてが全く予期していなかったことでした。御使いの告げたことを彼女たちはどのように受け止めたら良いか分からず、言いようのない不安に襲われ、気が動転しました。恐れて、墓から逃げ帰りました。恐ろしかったけれども、イエス様がよみがえられたとの御使いのことばから喜びも与えられていました。

ところで、9節以降はカッコの中に入れられています。多くの写本の記録から、元々のマルコの福音書の記述は8節までで、それに続く部分は8節の不十分な終わり方を補うために、他の福音書との調和のために、後から加えられたものだろうと考えられています。恐れで福音書が終わるのはふさわしくないということだったのかもしれません。しかし、人々の恐れということは福音書を通してしばしば記されていることです。イエス様において何かが示されるとき、神のみわざが行われるとき、そのことに接する人々は恐れるのです。しかし、恐れから信仰が生じ、喜びへと変わっていくのです。

イエス様がよみがえられたことを最初に知った女性たちも恐れました。また、その知らせを聞いた弟子たちも信じることができませんでした。しかしその後で、よみがえられたイエス様が彼らに会ってくださり、イエス様の復活が事実だと知り、聖書からその意味を悟ったとき、大きな喜びになったのです。敗北と思われていたのが、一転して勝利であると分かりました。挫折感に覆われていた心が、確信と希望に満たされました。そして、女性たちも男の弟子たちも主イエス様の復活の証人として立ち上がりました。主に仕えて福音を伝える彼らの本当の奉仕はここから始まったのです。

イエス様の十字架とよみがえりが歴史の中で起こった事実であることを受け入れましょう。

イエス様が私の罪を代わりに負って十字架で死なれ、よみがえられたゆえに、私の罪が赦され、救われるという福音を信じましょう。

神のなさることは私たちの考えをはるかに超えています。恐ろしいくらいです。それゆえに信仰が求められていますけれども、その信仰が与えられていきます。これも不思議な神のみわざです。そして、喜びを与えられ、確信を与えられ、新しい生き方をするようになるのです。一人一人がそのように導かれますようにお祈りします。

どうか心にあるキリストに従いたいという思いを表し、信仰の一歩を踏み出しましょう。そうするときに救いを与えられ、神の御業の証人とされるのです。